

京都の美術

京都の絵画（室町以降）

室町時代、將軍家には**同朋衆**が管理する中国の水墨画が収集されてそれを学ぶ雪舟や狩野正信などの絵師が京に集まり活躍した。正信は幕府抱え絵師となり、江戸時未まで継続する狩野派を開いた。大徳寺などの禅宗寺院に残された絵画の多くは彼らの手になる。

信長の全国統一以後、絵画は宗教画から離れ、世俗の様相を好んで表現するようになる。京の四季風俗を描く狩野永徳の「**洛中洛外図屏風**」に扇を手にする庶民が多数登場する。

「**扇絵は俵屋**」と称され、俵屋宗達はその名手として知られる。既製品の絵を売り買いする絵屋も誕生した。

徳川幕府は、御所や二条城の障壁画を江戸狩野の探幽を始めとする一門に命じ、長谷川等伯は妙心寺の龍泉庵に「**枯木猿猴図**」を残し、京狩野の山楽は豪華な襖絵を大覚寺に残している。土佐光起は御所の絵所預に復帰し、「**やまと絵**」を再興した。

江戸中期、**尾形光琳**は弟の**乾山**と合作し、華麗な足跡を残した。また**池大雅**・**与謝蕪村**・**伊藤若冲**・**曾我蕭白**・**円山応挙**・**呉春**・**原在冲**などか活躍し、文人画・写生画の諸流派が形成され今日の日本画の基礎が築かれた。江戸後期には諸国から書画が集められ、東山の料亭で、「**東山春秋展観**」という展覧会が開催された。明治になると、日本最初の美術学校京都府画学校が創設され、男女共学を実施し、**竹内栖鳳**・**上村松園**などを輩出した。